特集——❶ 鼎談 基軸を探る

日本の人づくり、次代を担う人材育成をどうする？

資源小国・日本が今後、資源としていくべきものは人材力ではないか。
とりわけ世界最速で進む少子高齢・人口減少社会において、
一人ひとりの力を、日本社会の持続的発展に不可欠な人的資源と位置づけ、
次代を担う人材を育成していく必要がある。
企業にとっても地域にとっても国にとっても、そして個人の幸福にとっても重要な人材育成をテーマに、
日本の人材力を検証し、針路を探りたい。

伊丹敬之
東京理科大学専門職大学院
総合科学技術経営研究科長・教授

藤原和博
元公立中学校長　大阪府知事特別顧問
東京学芸大学客員教授

松原隆一郎
東京大学大学院総合文化研究科教授

人口減少時代、日本の人材力の現状をどう見ているか？

人がバラバラな個人になる「無縁社会」、武道に躾が求められている

松原　本日は「日本の人づくり、次代を担う人材育成をどうする？」というテーマです。人材ということでは、よく言われる社会背景として少子高齢・人口減少時代ということがありますが、むしろ私が最近気になっているのは「無縁社会」。単身世帯が増え、人が孤立していく状況になっている。

これは、血縁、地縁、会社の中の社縁などが、この二十年ほどで急激に崩壊したせいではないか。特に高齢者には、それが端的に現れているように思います。

人がバラバラな個人になっていく趨勢があるようですが、人材が、家族や地元での人づきあい、会社の制度や慣行によって育成されるなら、バラバラになると、人材の力も落ちるというか、何か変化を被っている。ある意味、個人の自由は戦後、日本社会が求めていたことでもありますが、振り返ると少し困ったことになっている。

私は武道をやっていますが、新学習指導要領では、これから中学校でも広い意味での武道を取り入れ、集団でつきあうことについて、正課で扱おうとなっている。これまでも武道場に、小学生を連れてくる親御さんは多かった。親御さんは、何も投げたりすることを望んでいるわけではなく、なかなか家庭でうまく教えることができない挨拶、人づきあいの基本の指導を求めているのではないか。躾のためにやらせたいという要望が随分ある気がしています。

その背後には、昔に比べると法事なども減り、遠い親戚と会って挨拶をしたり、叱られたりすることがなくなったことがあるのでしょう。また戦後長らくあった地元の人づきあい、顔は知っているけど、あまり近くないおじさん、おばさん、見知らぬ人との袖のふり方というか、例えば、お風呂屋さん、路地や原っぱでのつきあいもなくなった。

それに代わるものとして、公教育でどういう躾ができるのか。武道に躾が求められるほど人づきあいが下手になっている現状が、特に若者にはあるのかもしれない。

家庭も地域も後退し、子供を大人にする「斜めの関係」がなくなった

松原　公教育に外部から関わられた藤原さんは、そのあたりをどうお考えでしょうか。

藤原　最初のリードとして、三つ申しあげます。まず、今は人口減少時代だということ。僕は日本は今後五十年ほどかけて、六千万人ぐらいになると思っています。あれだけ世界に版図を広げたイギリスとフランスが、成熟社会を迎えた今、ぐっと引っ込んで約六千万人。日本は人口学的な計算でも六千万人ほどになるという予測があり、それは前提として考えたほうがいい。

もう一つ、既に日本は成長社会から成熟社会に入っているんです。これは一九九七年と九八年が境目で、一人あたりの脂肪と蛋白質の消費が、九八年から一貫して下がっている。これは成熟社会を端的に現すデータです。要するに、もっと焼き肉を食おうという社会じゃなくなった。

成熟社会というのは、先ほどの指摘のように、みんな一緒に成長する社会でなく、独り独りバラバラになっていく社会。例えば昔ながらの標準世帯、両親と子供二人の家庭で、今のリビングの様子を見れば、息子はテレビゲーム、お姉ちゃんは携帯電話、お母さんは家事をしていて、お父さんだけが、ああ、これが家族団欒だと間違えて酔っている。昔、囲炉裏でしか火を焚かず、そこに集まる以外、飯は食えなかった状況が崩れ、レンジもあればコンビニもあり、個食――独りで食べることが可能になった。みんな一緒に何かすることはなくなり、同時に平均ということが意味をなさなくなる。

三つ目に、少子化は何がまずいのか。少子化と核家族化が同時に起きると、家族は社会じゃなくなるわけです。同時に地域社会が後退したので、子供が大人になるために必要な家族という社会、地域という社会で揉まれることがなくなった。昔は学校と地域社会と家庭が三位一体で子供を大人にしていたが、今、その機能が全部学校に押しつけられ、学校にはそれだけの機能はないから、か

人がバラバラになる時代、武道に躾が求められている（松原隆一郎氏 提供）

新学習指導要領
知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むため、授業時間数の増加をはじめ、小学五・六年生への外国語（英語）活動導入、中学での武道導入などを改善内容として、小学校では二〇一一年四月から、中学校では二〇一二年四月から実施される。

なりあっぷあっぷしている状態です。

なぜ、子供が大人になれないか。僕には仮説があって、子供が大人になるとき、親と子、先生と生徒という縦の関係だけじゃ無理だと思うんです。人間が揉まれる「斜めの関係」――兄弟姉妹やおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん、本当の肉親でなくても地域社会でその役割を果たしてくれる利害関係のない第三者。そういう斜めの関係が大事なのに、希薄になっている。

武道の話が出ましたが、僕が校長を務めていた東京都杉並区立和田中学校では新学習指導要領に先立ち、四～五年前から一年生に柔道の受け身をやらせています。なぜならその直前に、ある子供が転んだとき、手をつくという反射が起きず鼻の骨を折った。日常生活で転ぶことを自然に学べなくなっているんです。

斜めの関係がなくなったことが、身体のバランス感覚を奪い、人間関係のバランス感覚まで奪っている。嫌いとなると一切つきあわない。ゼロか一か、敵か味方かの関係が横行し、いじめが鮮烈になっていく。

さらに言えば子供が勇気を持って何かやろうとするとき、背中を押してくれるのは誰か。親は大抵反対しますが、おばあちゃん、おじいちゃんが、やってみろと。孫に対しては、全人生に責任を持つ必要がなく、余裕があるんです。だから斜めの関係が欠乏すると、背中を押してくれる存在をも失うわけで、誰も勝負に出なくなった。日本全体の保守化にも少子化が絡んでいることを指摘しておきます。

伊丹 敬之　いたみ ひろゆき
東京理科大学専門職大学院総合科学技術経営研究科長・教授;
一橋大学名誉教授（経営学）
1945年愛知県生まれ。一橋大学商学部卒、同大学院商学研究科修士課程修了、カーネギーメロン大学経営大学院博士課程修了。PhD。一橋大学で教鞭を執り、85年教授。この間スタンフォード大学客員准教授等を務める。94年から2年間一橋大学商学部長。2008年より現職。産業構造審議会委員など歴任。05年紫綬褒章受章。著書『人本主義企業』『デジタル人本主義への道』『経営戦略の論理』『経営を見る眼』『イノベーションを興す』『場のマネジメント 実践技術』『技術経営の常識のウソ』など。
http://most.tus.ac.jp/mot/mod_learns/learns03_detail.php?i=a17406

人は人のネットワークの中でしか育たない。社会崩壊をくい止め、少数だから精鋭を育てる

松原　なるほど。伊丹さんはどうですか。

伊丹　お二人の話を聞きながら大切な話が多いなと思っていますが、私はさほどペシミスティックにはならない。

人口減少については、年金問題や途中経過の凌ぎ方など難問はありますが、長期的にはそんなに悲観しなくてもいいのではないでしょうか。もちろんGDPは人口に比例するから小さくなりますが、絶対額が小さくても、一人あたりの豊かさがあればいい。

人口減少ということで、私の頭に浮かんだのは「少数精鋭」です。あれは、精鋭を少数集めるといいという話なのか、少数だと精鋭になる、大勢いるからぶら下がるやつが出てくると考え、日本全体の人材力を考えればいいと思うんです。

一方、社会のバラバラ化で浮かんだ一つのイメージは、アメリカの大学に教えに行ったとき、七歳と十一歳の息子を現地の小学校に入れた。学校が引けると、白人の子供たちが遊びに来る。一人親家庭で親が働きに出ている子供たち。うちはおばあちゃんまで連れて行ったから、家庭の温もりがわが家にあるんだね。みんな寄ってくるんだ。それを見て、離婚率が四割に達し家族の形がなくなるようなカリフォルニアで一体この子たちはどう育つんだろうと思ったのが二十五年以上前。

今、日本でも人がバラバラになっているようですが、そういうカーブはどこかで変曲点を迎えることも多いから、何とか押し戻すことをみんなが意識する。斜めの関係の大切さに日本全体が気づき、嫌われることを覚悟して、あえて厳しく接する大人が増えないといけない。これは学校や国に任せても、解決する問題ではない。非常に当たり前の言葉を使えば、「家族の再生」とか「おじいちゃんの復権」。それがもっと日常的に語られるようにならないと、日本の人材力は大問題だと思います。

松原　企業の教育や研修はどんな状況でしょうか。

伊丹　日本企業が研修に熱心だったとは思わないけど、教育には熱心だったと思います。先輩が後輩に教える、教えあう場づくりには、日本企業は非常に熱心だった。それは研修ではない。OJTを、あの手この手でおせっかいなほど熱心にやってきたが、今、それに手を抜き始めた。

その理由は社会全体のバラバラ化。おせっかいをするにはエネルギーが要るし、ノウハウも必要。だけどおせっかいをされた経験がない人が増えている。となると他人におせっかいもできない。仕事の現場での「斜め上からの教育」が減り、人が育つケースが減っている。

バラバラな無縁社会は、絶対に具合が悪い。人は結局、周囲の人のネットワークの中でしか育たない。それが壊れつつあるとすれば、人のネットワークの再生を、地域社会でも会社でも家庭でも心がけないといけない。愚直なメッセージですけど、それを強調する必要がある。

OJT（On the Job Training）
職場の上司や先輩が部下や後輩に対し、実際の仕事を通じて、必要な知識、技能、態度、価値観などを身につけさせる教育訓練。

もう一つ、バラバラになっていく社会というのは、実は個が強くなるためのプロセスかもしれないと思いました。私がイメージしたのは、数カ月暮らしたノルウェーです。フィヨルドの寒々しい景色のなかで、独りぽつんと住んでいる。ここまでバラバラになれば、強くなるぞと。でも人口密度の高い日本でそこまでのバラバラは無理だから、結局はネットワークを重視せざるを得ないでしょうね。

モラルを考える前に権力で規制、息苦しい社会になってきた

松原　人口減少が大変だという背景には年金問題などがありますが、それは子供の世代から無理やり年金をもらわなきゃいけないシステムを前提にしているからだと思います。逆に減っても構わないように、余裕があるうちにシステムを変え、人口の増減に関係ない社会をつくればいい。

もう一つ、自由や平等という考え方自体、バラバラ化を後押ししていると思うんです。例えば禁煙を巡る状況を見ていると、権力で規制していく息苦しい社会になりつつあるんじゃないか。もともとたばこなんて、喫煙者がほかの人に煙がかからないようにすれば済む。なのに、人と人が狭い国土の中でどうやって一緒に暮らしていくかという、つきあい方のモラルを考えるより先に、どんどん規制を強め権力でやめさせてしまうのでは、あまり暮らしいい社会にはならない。

ちょっと話が飛びますが、最近相撲の八百長が問題になっています。でも相撲はもともと近代スポーツではなく、興行です。議論を聞いていると、アマチュア相撲のような話ばかり。アマ相撲では八百長をやってはいけない。しかしプロの相撲はあくまで見せるための興行なので、面白くするためのアマとは違うルールがある。

例えば顔への張り手は、スポーツのルールとしてはOKですが、日本の神事として見栄えが悪い、醜いということで内々で禁止になったと思うんです。日本は相撲の美という、興行上もしくは神事上の何か曖昧さも面白がる伝統があった。それをアマスポーツのように捉え、潰していくのは、余裕がなくなってるなと感じます。

今、あちこちで余裕がなくなっていて、昔ながらの面白い文化が消えている。経済原理で機会均等という原則だけが突出し、会社でも成果主義になったり。個人の自由か規制かの二者択一で、モラルや文化が閉め出されている。一見、正義であることが振りかざされた結果、どんどん人がバラバラになり、世の中ギスギスして悪循環に陥っている。

日本の人材力を検証すると？

二十四時間の集団生活が人を育てた日本

松原　日本の人材力を検証したいのですが、歴史を振り返ると、江戸時代には「武士道」が人の生き死に、人生観とともにモラルを教え込みました。もう一つは、個人

武士道
日本の近世以降の封建社会における武士階級の倫理・価値基準・行動様式の根本をなす思想。義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義を深く重んじる。

藤原和博さんが校長を務めた和田中学校では、学校の授業と世の中で起きている現実をつなげた「よのなか科」の授業や、学校と地元をつなげてできた「地域本部」主催の土曜寺子屋など、新しい取り組みが実践され根づいている。
記録映画『和田中の1000日』(グループ現代)より

の生き死によりも、むしろお家をいかに残すか。「家制度」は長男が継ぐイメージがありますが、日本では長男よりも家が大事。長男がボンクラなら養子をとります。家を残すため人は死んでも構わないということで、死を覚悟させる武士道があった。

日本人には、もともと自分の勝ち負けよりも団体戦――集団の中で自分も生き、集団をより生かしていく発想があったのは間違いない。

伊丹　だから、一見古く見える日本の江戸時代からの人の育て方のしくみを見直せばいいですね。将来の日本の人材力――人口減少のもとで少数だから精鋭になるためには、そのメカニズムを再稼働させる必要があります。

小川三夫さんという宮大工の棟梁が、宮大工を育てる場所を持っておられます。入りたい人が大勢来ますが、元暴走族とか不良だった人ばかりを採るようにしていると言うんです。大学を出た人なんて、「大学出てるなら、どこかで働けるだろう。おまえなんかここへ来るな。ほかにもっと鍛えるべき人がいる」と。

それは完全合宿。住み込みで四六時中、二十数人が一緒の部屋に寝泊まりする生活を数年間させる。すると、初めていろんなことにみんなが気づき始める。本当の大工はそうしないと育たないとおっしゃるんです。教室で教師が教えるなんてことじゃなく、二十四時間こそが学ぶ場であると。

とすれば会社などそのうちの十時間とかを過ごすのに、そこで個人別の成果主義を入れ、後輩に教えることを躊躇させるようなバカな真似はするな。むしろもっと社内運動会をやれ、社内旅行をやれ。そういうアナクロニズムの意見を私は持っています。

相撲の話にしても、なぜ相撲は次々に強い力士が育ち続けているのか。おそらく前近代的に見える鍛え方にヒントがある。大部屋で、宮大工の育て方と本質は一緒です。やること自体は個人技だけど、育つプロセスは団体生活。その原点を守っているから育つんじゃないかな。

松原　日本の一つのやり方ですよ。

もう一つ言えば、日本は非常に老舗の多い国。法隆寺をつくった金剛組なんて飛鳥時代の創業です。中国もヨーロッパも百年を超える会社はほとんどないなかで、日本はかなり暖簾が続いている。これは家制度と関係があると思うんですが、今残っている老舗って結構、新しく過激なことをやっている会社が多いらしい。だから古い会社がダメだとは、イノベーションの観点からも言えない。

「情報処理力」は高いが、「情報編集力」は低い日本人

松原　さて、戦後に話を移すとしたら、藤原さん、公教育って結局、何の働きをしたんでしょうか。

藤原　日本は戦後、GHQが入ってきた一年ほど、どんな田舎でも、君の意見はどうなんだねという民主化授業――僕がやっている「よのなか科」のようなワークショップ型の授業が行われた。それが朝鮮戦争が始まりGHQが引くと、いきなり覚え込ませる形の教育に戻った。僕はそれはラッキーだったと思います。日本人に「情報処理力」を付与して、処理力の高いホワイトカラーとブルーカラーの増産に貢献し、欧米へのキャッチアップを速めた。そこでいちいちクリティカルシンキング（批判的思考）をしていたら遅れたわけだから、五十年間はそれで大成功した。

ところが、それに呪縛されている。成熟社会に入って、この十五年ほど日本の足がとまっていると感じるのは、情報処理力を磨いていくと人間が正解主義に陥るんです。正解を速く正確に当てることはできる。ビジョン――手本となる図柄や世界観、真似したい目標などがあれば、どこよりも速く実現することはできる。じゃあ、ビジョンそのものを誰がつくるかという話です。

ビジョンをつくるのは、僕が言う「情報編集力」。それが国際比較の場で用いられるPISA型の学力につながるのですが、それは不得意なまま、今も日本の小中学校の教育は九割方が正解主義。

個性や創造性をめざした「ゆとり教育」は失敗だと言われていますが、僕はそうは思わない。なぜなら、日本のゆとり教育を学んだフィンランドが十五年間徹底的に磨き上げた結果がPISA型学力で、三回連続ナンバーワン。一方、日本では中途半端な取り組みに終わった。文部科学省が総合学習の「例」を示してしまったんです。サンデル先生の白熱授業のように、何のテーマでもいいからディベートをやれと言えば良かったのに、環境問題

藤原 和博　ふじはら かずひろ
元公立中学校長;大阪府知事特別顧問; 東京学芸大学客員教授
1955年東京都生まれ。東京大学経済学部卒。リクルート入社、新規事業担当部長など歴任、93年からヨーロッパ駐在、96年同社フェロー。2003年より5年間、東京都内では義務教育初の民間人校長として杉並区立和田中学校長を務める。世の中と教室をつなぐ「よのなか」科などユニークな教育を実践。08年大阪府知事特別顧問。著書『人生の教科書[よのなかのルール]』『人生の教科書[人間関係]』『35歳の幸福論』『はじめて哲学する本』『つなげる力』『さびない生き方』など。
http://www.yononaka.net/

家制度
家を基本単位とし、家父長権をもつ男子が家族員を統制・支配する制度（家父長制）。長子男系の世襲が原則だが、血よりも家業・家財・家名の継続性を重視。養子縁組で家督を継がせることが可能。

小川三夫（1947～）
宮大工。伝説の宮大工・故西岡常一棟梁の唯一の内弟子であり、寺社建築専門の建築会社「鵤工舎」創設者。

金剛組
飛鳥時代、五七八年創業の世界最古の企業。寺社建築を専門とする。

よのなか科
学校の授業と世の中で起きている現実をつなぎ、子供と大人が一緒に学ぶスタイルを採る授業。

PISA型学力
OECDが、義務教育を終えた十五歳を対象に二〇〇〇年度から三年に一度実施している国際学習到達度調査（PISA）で問われる「読解リテラシー」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」。正解が一つとは限らない問題に対し状況に応じた納得解を導く力。

か国際理解か情報か福祉・ボランティアとか言ったため、国際理解では英語、情報ではコンピュータを教えるという具合に再び正解主義の教育がはびこり、現場が混乱して、学力派に揺り戻されて終わった。今また日本は情報処理力偏重に戻っているが、これはアングロサクソンや中国、インドの思うつぼ。経済を支配する側としては情報処理力の高い労働力は使いやすい。そういう人をいまだに日本は大量生産している。

人的資源の育成へ、日本の針路と課題は？

恒産なくして恒心なし――食い扶持を稼ぐため輸出型だけでない国際競争の担い手を育てる

松原　問題が山積しているようですが、今後の日本の針路と課題に話を進めたいと思います。

今、世間で言われているのは、国際競争力が落ちてきたので人的資源を何とかしなきゃいけないということ。ただ私は、そもそも国際競争力という話が変だと思うんです。日本は経済力が小さかった時代には輸出立国が可能だったが、今のように大国になると外国にものを売る国際競争力は円高を促進するだけ。むしろ日本国内で、ガラパゴスだろうが何だろうが、世界に類を見ない浮世絵みたいな独創的なものをつくったほうがいいんじゃないか。

外に向けての人材育成より、世界に何を言われようとも自分たちで面白いと思うことを競いあう競争力。そういう場が国内にできないといけない。外を気にしてビクビクしない人材育成、自分たちが面白がることのできる場が成熟社会じゃないかと私は思うのですが、いかがでしょう。

藤原　輸出産業型でない針路のヒントは、星野リゾートの社長に聞いた話。日本人が海外旅行に行き、金を使うのがアウトバウンド、海外から日本に来るのがインバウンドで、予測では二〇一七年頃にアウトバウンドをインバウンドが超えると。日本は観光資源が豊かで、今、富士山が見える別荘が中国の人にがんがん買われている。京都はもちろん行きたいし。日本人が思っている以上に、日本は安全で清潔で、もてなしの心がある。外国の人たちが日本に来て金を使ってくれることこそ輸出だと。

松原　サービスの輸出ですからね。

藤原　だから各観光地がどれだけ面白いコミュニティをつくるか。その知恵を出す国民にならなきゃいけない。

伊丹　日本が得意なことをやるのはいいが、今後ますますグローバル化する世界で、七千万～八千万人の日本人がそこそこ豊かな生活をできるだけの経済力を維持した上でなければ、「恒産なくして恒心なし」。だからまずは日本人の食い扶持をきっちり稼ぐ国際競争力が大切です。

単に輸出産業を再生させるだけではなく、世界で日本人の活躍の場を拡げるための国際競争力。外国から富士山を見たい人を連れてくるのも立派な国際競争力です。あるいは外国で事業活動を行い、そこで生まれる資源の一部を日本に還流させることによって、日本の豊かさをキープする。これも国際競争力です。そう広く捉え、そういうことができる人材を育てないといけない。

妙な平等主義が人を潰す、「偏って尖った人」を伸ばす工夫を

藤原　だから僕は情報編集力と言うんだけど、小学校なら一割程度、中学校で二～三割、高校で五割程度は、正解主義でなくクリティカルシンキング。誰かが何かを言ったとき、ちょっと待てよと。それは裏から見るとどうなのか、上から、下から、左から、右から見たらどうかという複眼思考で考える。それが正解主義の処理力に対し、修正主義ともいえる編集力を育てる。やってから人の意見を聞いて修正し、自分の意見を進化させていく。それをしないと、成熟社会を楽しく生き抜く子供たち、自分の人生を編集していく子供たちは育たないんじゃないか。

伊丹　それはどうでしょう？　編集力みたいな教育をシステマティックにできるのか。アメリカで子供を学校に行かせた経験では、編集力を育てるというより、先生が手を抜いてる感じ。結果として子供に編集力がつくことはあるが、手を抜けば一方で情報処理力は落ちるんです。

松原　私は公教育で情報処理型は高校まではある程度必要だと思います。例えば、塾は悪いと言われますが、受験用に文学作品のエッセンスだけ読ませたりするので、息子はあれで突然、本を読むようになった。

ただ、大学で情報処理型だけをやるのはまずい。大学で

イノベーションを担う人材育成のための大学院で学ぶ社会人学生（東京理科大学専門職大学院 提供）

マイケル・サンデル（1953～）
米国の政治哲学者。ハーバード大学での講義「justice（正義）」が史上最多の履修学生数を記録。二〇一〇年ＮＨＫでも『ハーバード白熱教室』として放映された。

星野リゾート社長・星野佳路（1960～）
軽井沢の老舗旅館・星野温泉（現・星野リゾート）の三代目社長。破綻した大規模リゾートの再建も手がける。

恒産なくして恒心なし
ある程度安定した財産がないと、心も動揺しがちで、安定した状態を保てない。孟子の言葉。

は卒論を書くことに全力を尽くすようにして、もっと学生同士や先生とつきあうなかで何かを学んだほうがいい。

ちなみに私、柔道部長をやっていて、柔道部卒論というのをやらせている。ビデオを撮るだけですが、自分が四年間でオリジナルに考えたと思う技をやれと。

伊丹　なるほど、そういうのいいね。暗記力に優れた学生が優秀な成績をとるのとは全然違う次元の話ですね。

松原　違いますね。習うだけでなく、団体生活で四年間過ごして工夫したことを一つ形にするのは良いかなと。

人材は集団の中で育成されるというのは全くそのとおりで、集団というのは触媒の働きをしているのではないか。人と話しているうちにアイデアが浮かんだりする。個人の頭の中だけで完結して、いきなり発揮できるようなタイプのクリエイティビティって、実はないんじゃないか。

だから、良い企業というのは触媒型の場が存在している企業。大学も、勢いがある大学にはそれがある。

伊丹　情報処理力だけの公教育をやっても変な人は必ず出てくるから、それを潰さない社会のほうがいいと思いますね。編集力に優れた人って実は処理力がものすごく高い。中途半端な処理力の人が一番編集力がない。

世の中は、ごく普通の人が大勢いて、「偏ってるけど尖った人」が少数いてというバランスが、最大多数の最大幸福ではないか。編集力が豊かで偏って尖ってる人って、別に日本だけでなく、どこの国でも少数派。多数派である普通の人のレベルを上げるのが公教育の基本だと思うから、情報処理力で構わない。

ただ日本は、少数派がさらに息苦しくなるような社会の状況があるから、そこは直したほうがいい。偏ってるけど尖った人を、どうすれば拾い上げられるか。おじさんが背中を押すのか、上司が引っ張り上げるのか。そういうしかけをどうつくるかが、国としては本質的な問題ではないか。だけど、ここで妙な平等主義が必ず障害になるんです。

藤原　僕は長男が小学校に入学したときリュックで行かせた。そしたら初日に自分以外がランドセルなのを見て、泣きながら帰ってきた。日本には全員揃ってというカルチャーがあり、それがどれほどの暴力かということに気づいていない。ここを改めないと多様性は生かせない。

例えば、親が日常的にクリティカルシンキングをしていると、子供にも刷り込まれると思うんです。それを増やしていかなきゃいけないんじゃないか。

伊丹　今の日本は半世紀ほど前と比べ、偏ってて尖ってる人が減り、「偏ってて尖ってない人」が増えている。これは具合悪いよ。自分勝手なことをして、権利を主張するだけ、他人と折りあいが悪いだけだもん。（笑）

松原　確かに駅前の飲み屋で頑固なおばちゃんがやってる面白い店とか減ってます。日本社会は均質だといわれたが、昔のほうが変な人が大勢いた気がします。

伊丹　日本は実はそんなに均質ではなかったんですよ。表面上の行動パターンとして同じようにやるべきところはやるという躾が効いてただけじゃないかな。よくアメリカはクリエイティブな人が大勢出るといわれるが、あれは本当に勝手なやつが多いんです。その中で本当に能力のある人だけが育つ。一方で育たない側は、実に大勢が惨憺たる状況。でも、こんな過密な日本でそこまでの状況は、社会全体がそのストレスに耐えられないと思うから、そのルートは諦めるしかないというのが、私の平たい感覚です。

団塊世代はリタイア後、校長・学園長として学習コミュニティを進化させる

藤原　情報編集力を磨く具体策は二つあります。一つは、情報編集力もコミュニティの中で揉まれないと養われない。だから学習コミュニティをつくることが大事です。

例えば、ここ五年ほどで第二の人生を始める団塊の世代一千万人の十人に一人が地元に戻れば、百万人。彼らは知識、技術、経験が豊富で、おそらく住宅ローンも子育ても終わっていて、余裕があるんです。そういう人たちをボランティアとして学校教育の中に導き入れる。学校の外で地域対策としてやるのでなく、学校の中でサポートしてもらい、地域全体で学びあう学習コミュニティをつくる。

これは図書室を大人もいられる空間に改造することも大事だけど、「よのなか科」のような、大人の生涯学習と子供たちの学校教育を融合させ、大人と子供が一緒に学べる授業。例えばハンバーガー店の店長になったつもりで、どこに出店したら一番儲かるかを一緒に考えてプ

松原 隆一郎　まつばら りゅういちろう
東京大学大学院総合文化研究科
国際社会科学専攻教授
（社会経済学、経済思想）
1956年神戸市生まれ。東京大学工学部卒、同大学院経済学研究科博士課程修了。85年東京大学助教授、のち教授。消費社会化した資本主義の分析には定評がある。著書『日本経済論――国際競争力という幻想』『分断される経済』『長期不況論』『失われた景観』『思考する格闘技』『消費不況の謎を解く』『経済思想』『武道を生きる』『豊かさの文化経済学』、共著『共和主義ルネッサンス』など。国際空道連盟大道塾四段、同塾ビジネスマンクラス師範代。柔道三段、東大柔道部長。
http://homepage3.nifty.com/martialart/

学習コミュニティ（学校支援地域本部）
子供たちの学びを豊かにするために、保護者と地域が力を合わせて学校を支援する組織。和田中学校では、学生ボランティアによる「土曜寺子屋」、司書ボランティアを巻き込んだ「図書室改造」、地元商店街や町内会による「校庭緑化」、進学塾と提携して優秀な子をさらに伸ばす夜間授業「夜スペシャル」などのプロジェクトを行っている。

レゼンしあうとか。そういう正解が一つではない授業を、新しい時代の学習エンターテインメントにしていく。楽しくないと団塊の世代の人たちも来ないと思うんです。お金が発生するわけじゃないから、自己犠牲では続かない。小中学生と一緒に学ぶと楽しいというコミュニティをつくると、実は学んでいる大人の姿から、子供たちが学ぶんですね。それを僕は三年ほどやっていて、全国に学習コミュニティが約二千五百カ所できてきた。

これを進化させる条件としてもう一つの策は、攻めのマネジメントができる校長。教員経験しかない校長だと、守りの管理しかできない。だから今、約三万人いる小中学校長の十分の一、三千人ほどは民間などから来てほしい。ただ、校長には専任義務があり、誰でもできるワケじゃない。そこで、大体、中学校一校に小学校二校で構成される校区の上に、学園という概念をつくる。学園長は外から入れ、学習コミュニティにするための外側のネットワークづくりとか、授業を面白くするプロデュースをやる。これは非常勤で、年齢問わずでいい。

伊丹さんなら孫が通う小中学校区に、自分は百億円あるから三十億円寄附して伊丹記念講堂を建てるとか。

伊丹　そんなお金、ないよ。（笑）

藤原　じゃあ、七億円で体育館、千五百万円で図書室とコンピュータルームを一体化したメディアセンターとか。

実は今、日本の個人金融資産千四百兆円を持っているのは、団塊以上の世代。この層が金を使うとしたら孫なんです。だから孫の学校教育と生涯学習を結びつけることで、千四百兆円の一割でも落ちてきたら、すごい経済効果。その拠点として、僕は「地域本部」という名で全国に二千五百カ所、学習コミュニティをつくった。それを進化させるために、校長なり学園長の強化が大事なんです。

明治の元勲には退役して学校長になった人が多い。『坂の上の雲』で有名な秋山好古は陸軍大将までやって、定年後、元帥になってほしいという依頼を固辞して、ふるさとへ帰って中学校の校長をやった。大将までやった人がスパッと辞めて、地元で自分のネットワークを生かし、自分の知識、技術、経験を若い人たちに移植することに命を賭けたわけです。

それが今の日本は何なのかと。定年後もしがみつくのではなく、日本人の美しい生き方として、あと五年間ぐらいやれる元気なうちにスパッと辞めて、地元で学園長になって、自分が築き上げたネットワークを全部つなぎ変えてから死ぬ。そういう生きざまを団塊の世代の人たちは示してほしいんです。

萎縮している四十歳前後に仕事の成功体験を、会社人間は地元での社交場づくりをもう一度

松原　伊丹さん、いかがですか。

伊丹　私は最近、中年になりかかった日本人の再学習意欲の大きさを感じていて、その人たちが改めて目覚める場を提供するのが私の仕事だと思っているから、藤原さんの話はいい話だけれども、私は乗らない。（笑）

『坂の上の雲』
司馬遼太郎の歴史小説。明治という近代日本の勃興期、登っていけばやがてはそこに手が届くと思い焦がれた西洋近代国家を「坂の上にたなびく雲」にたとえ、秋山好古・真之兄弟と正岡子規の三人を主人公に、近代国家日本の形成を大きな時代の流れの中で描いている。

秋山好古（1859〜1930）
愛媛県松山市出身の陸軍軍人。「日本騎兵の父」と呼ばれ、陸軍大将まで務めたが、一九二四年、退役し、北予中学校（現・愛媛県立松山北高校）校長に就任。

＊なお、東京理科大学専門職大学院「総合科学技術経営研究科」は二〇一一年四月より「イノベーション研究科」に名称変更。

私が今、研究科長をしているのは、技術者のための夜間と土曜日だけのビジネススクールです。子供の教育に金のかかる四十歳前後の人たちが、百万円以上の授業料を自分で払って学びに来る。日本再生の鍵はこの人たちの再教育が握っているかもしれない。彼らはバブル崩壊後に就職して、失われた二十年をもがき続ける日本経済のなかで仕事人生を送ってきた。その前の世代は、自分の努力以外の力もあってかなり成功経験をしているのに、この世代は成功経験をした人の比率が少な過ぎる。

企業によって人の育ち方が違う。あの会社は人が育っているなという会社と、この会社は不思議に人が育たないねという会社が明確にある。仕事の場のあり方が悪い会社は人が育たない。育たない会社の人たちは、萎縮しているんです。その人たちに、そうでもないよ、こう考えればいいと、物を考える場を提供する。こっちが知識を伝達するなんてことでなく、もう一遍、リ・オリエンテーションすることの大切さをつくづく感じています。

私はそれを七十歳までの仕事にしようと思っているので、残念ながら藤原さんのアイデアには乗れないんです。

松原　私も最後に申しあげると、私は今、町道場で七十人ほどのおじさんたちのクラスをみています。それで言えば、武道は紳士・淑女の社交場です。若い者は勝ち負けを競いますが、年寄りはここで汗を流した後、ビールを飲みながら、来し方・行く末、いろいろな話をします。

考えてみると、私はたまたま武道でつきあっていますが、女性は江戸時代から一貫してお茶、お花でつきあってきた。男は一時期、会社に閉じこもりきりだったから、世間でのつきあいはなかったんですが、ヨーロッパではクラブチームという形で、地元で草サッカーをやったりしながら、みんなが集まり続けていたのです。

似たようなことが成熟社会の日本であってもいい。大学で学び直すことはもちろん、それ以外にも地元の、武道でも、お茶、お花でも、何でもいいからもう一度やり直してもいいのではないか。学校の部活でも教える人がいなくて部が潰れていますが、そのときは六十歳ぐらいで、地元で教えたいと思っている元気なおじさんに来てもらうといい。得意なこと、やりたいことで人と人をもう一度つなげればいいのかなと、私は感じています。

きょうはありがとうございました。躍

（二〇一一年二月八日 実施）　編集／田窪由美子